

肥前陶磁の源流

今、生産技術の視点からどこまで追えるのか

The Origin of Hizen Ware: to What Extent
We can Trace It Back from the Standpoint of Production Technology

村上伸之

はじめに

- ①技術区分・時期区分の捉え方
- ②岸岳山麓の窯業の技術的位置付け
- ③近世窯業の源流と成立時期

おわりに

【論文要旨】

肥前の近世窯業は、当時としては卓越した技術力を背景として、わずか数十年あまりの間に、既存の大生産地と肩を並べるまでに急成長した。これは日本の窯業史上でも一つの画期として位置付けられ、近世窯業を印象付ける登り窯や磁器生産など、この新しい窯業の産物が手本となり、国内窯業の活性化が図られた。ところが、肥前にはその母体となった既存の窯業は存在しておらず、海外で完成した技術をセットとして導入することによって成立した。その源流となる技術については、従来から文禄・慶長の役（1592～98）の際に朝鮮半島からもたらされたことは明らかになっているが、これは窯業発展の礎であり成立の礎ではなかった。この成立の礎となった窯業についても、古くから北朝鮮地域にその源流があり、最初岸岳山麓に定着したと漠然と考えられてきたが、現状では、解明は遅々として進んでいない。そこで、主として製品の類似性の比較に終始した従来の方法を離れ、生産技術的な視点から、現在の資料でその源流にどこまで追えるのか考えてみることにした。まずは、現在、ごく普遍的に用いられている技術系統分類と時期区分を取り上げ、その捉え方を通して生産技術の性質を再確認し、それをもとに肥前における岸岳山麓の窯業の技術的位置付けを、主として窯体構造や窯詰め技法などから追ってみた。その結果、肥前の窯体構造は3種類に大別され、岸岳山麓では独特な割竹式登り窯が用いられていること、ほかの地域と異なった窯詰め技法が定着しており、それらも基本的には朝鮮半島の技術が導入された可能性が高いことを指摘した。次にそれらを踏まえ、北朝鮮地域の採集品と比較することによってその技術的類似性を明らかにし、大阪市の出土資料などとの比較によって、現状では、成立年代は1580年代後半～1590年前後の可能性が高いことを示した。

はじめに

豊臣秀吉による天下統一が着々と進む中、九州の西端、かつて肥前と呼ばれた地域に、忽然と新しい窯業地が誕生した。そして、当時としては卓越した技術力を背景として、わずか十数年あまりの間に、既存の大生産地と肩を並べるまでに急成長を遂げた。この刺激的なできごとは、日本の窯業史上でも一つの画期として位置付けられる。近世窯業を印象付ける登り窯や磁器生産など、この新しい窯業の産物が手本となり、国内窯業の活性化が図られたからである。

文禄・慶長の役（1592～98）は、別名「やきもの戦争」と称されることがある。これにより、朝鮮半島から多くの陶工が連れ帰られ、九州・山口などの各地に新たな窯業地が誕生した。多分に漏れず、肥前の窯業も、この不幸な戦争を抜きにしては語ることはできない。ただし、肥前がほかの地域と異なるのは、これが近世窯業成立の端緒ではなく、発展の礎となっていることである。

ところが、この成立の礎となった窯業については、依然として謎に包まれたままである。当初、岸岳山麓の窯場で産声を上げたことはほぼ間違いのないとしても、その実体は不明瞭な点が多い。この肥前の根幹をなした生産技術の解明は、単に成立期の窯業を知ることには止まらず、近世窯業全体の位置付けを考える上でも欠くことができない。

そこで本稿では、この成立期の窯業について生産技術的な視点からその性格や特徴を通観し、技術の源流となった窯業やその成立時期について、現在の資料でどこまで追えるのか考えてみたい。

①……………技術区分・時期区分の捉え方

（1）技術系統分類と技術移転のメカニズム

肥前の近世窯業は、誕生後およそ半世紀をかけその生産基盤が整備され、全国でも有数な産地としての地位がほぼ確立した。その間に操業した窯場は、比較の実体が明確になっているものだけで60ヶ所以上、全体としては、おそらく100ヶ所近くに及ぶものと推定される。窯場は、主として佐賀県の西部からその西側の長崎県北部に集中しており、特に佐賀県の伊万里市や武雄市、有田町などに数多く分布している。まずは「唐津」の名を冠された陶器の生産がはじまり、やや遅れて、「伊万里」と称された日本初の磁器生産が追加された。

陶器を生産した窯場については、従来から、岸岳山麓に位置する「岸岳古唐津」（佐賀県北波多村・相知町）、その周囲の旧波多氏・唐津藩領を中心に広がる「松浦古唐津」（佐賀県伊万里市・唐津市・浜玉町ほか）、多久市の「多久古唐津」（佐賀県）、武雄市・塩田町・山内町ほかの「武雄古唐津」（佐賀県）、有田町・西有田町（以上佐賀県）・波佐見町・佐世保市・平戸市・諫早市（以上長崎県）⁽¹⁾ 一帯の「平戸古唐津」などに分類され、さらに細分化が試みられるなどして研究が進められてきた。この分類は、その命名から、一見地域を基準とした分類と錯覚されるが、実は技術系統分類である。核となる地域名が冠されているが、必ずしも地理的な制約は受けないのである。事実、佐世保市の窯場は、総体的には「平戸古唐津」に分類される。しかし、長葉山窯跡は「松浦古唐津」、牛石窯跡は「武雄古唐津」であり、地域を超えて配置されることもある。

入り乱れた技術の交通整理を行い、技術の系統を分けておくことは、もちろん重要には違いない。その手法として、この分類では、主として伝承や製品に認められる特徴を素材として、「窯」という一つの生産単位で技術の移動が捉えられている。ところが、これには多少無理がある。

まず、分類根拠の柱の一つに、事実確認のできない伝承を加えることには抵抗がある。とりあえず、何らかの方法で事前の検証は必要であろう。加えて、技術の全体像を捉える素材としては、やはり製品だけでは役不足である。「窯」に包含されるすべての技術的要素が、直接製品の表層的なスタイルに影響を与えらるゝとは限らない。また、すぐに目に見える物質的な形として反映されるとも限らない。つまり、まずは生産工程に関わるものも含め、可能な限り多角的な方向から素材集めを試みる必要があるだろう。

しかも、はたして「窯」という単位が適切なのか、事前に検討してみる余地もある。一般的に「〇〇窯」と呼ぶ場合、概念的にはハードな窯体を指さないことはいうまでもない。生産の成果品である製品は、数々の工程、多くの人の手を経て、窯体で焼成されることによって完成する。つまり、それに関わる一括りの生産技術を包括し、生産を象徴する窯で代表させたのが「窯」という単位なのである。したがって、個人ないしは一つの生産技術内で分業化された集団の場合、「窯」ごとに技術系統に配置しても何ら問題とはならない。ところが肥前の場合は、前提として、地域の中に源流の異なる技術が、密着して混在することを念頭におく必要がある。しかも、当初から各焼成室が所有単位となる、複数の焼成室を連ねた登り窯が用いられている。つまり、同質・異質は別としても、とりあえず複数の技術集団によって、一つの「窯」が共有されていることだけは確かである。ならば少なくとも、技術系統に配置する上で、「窯」が絶対的な単位とならないことだけは自明のことである。

では、何で括るべきか。と考えること自体ナンセンスなのかもしれない。なぜならば、それぞれの源流を持つ生産技術が、それぞれ孤高を保って継承されたのではなく、複雑に絡み合っ、一つの窯場や地域の生産技術を形成しているからである。その組合せの違いをはじめとしたさまざまな条件の差が、地域や窯場の個性を生じさせる一つの要因といえるだろう。よって、あるいはもつれた糸を丹念に解していけば、個々の技術系統にまで遡れるのかもしれない。しかし、それにはとりあえず、地域や窯場にどんな差があるのか明らかにしておく必要がある。そこで、近似性を持つ地域ごとに、暫定的に括ってみると以下ようになる（図1）。

a) 岸岳周辺地域

岸岳の位置する北波多村や相知町をはじめ、唐津市、浜玉町、伊万里の一部など、江戸時代に唐津藩領であった地域。細分すれば、岸岳山麓の窯場とそれ以外に分けられる。

b) 伊万里市周辺地域

佐賀県伊万里市の中で、江戸時代に佐賀藩領であった地域。

c) 有田町周辺地域

有田町を中心に、西有田町、波佐見町、佐世保市（三川内）など、その周囲の地域。

d) 武雄市周辺地域

武雄市や多久市、嬉野町、塩田町など、武雄市の周辺に位置する地域。

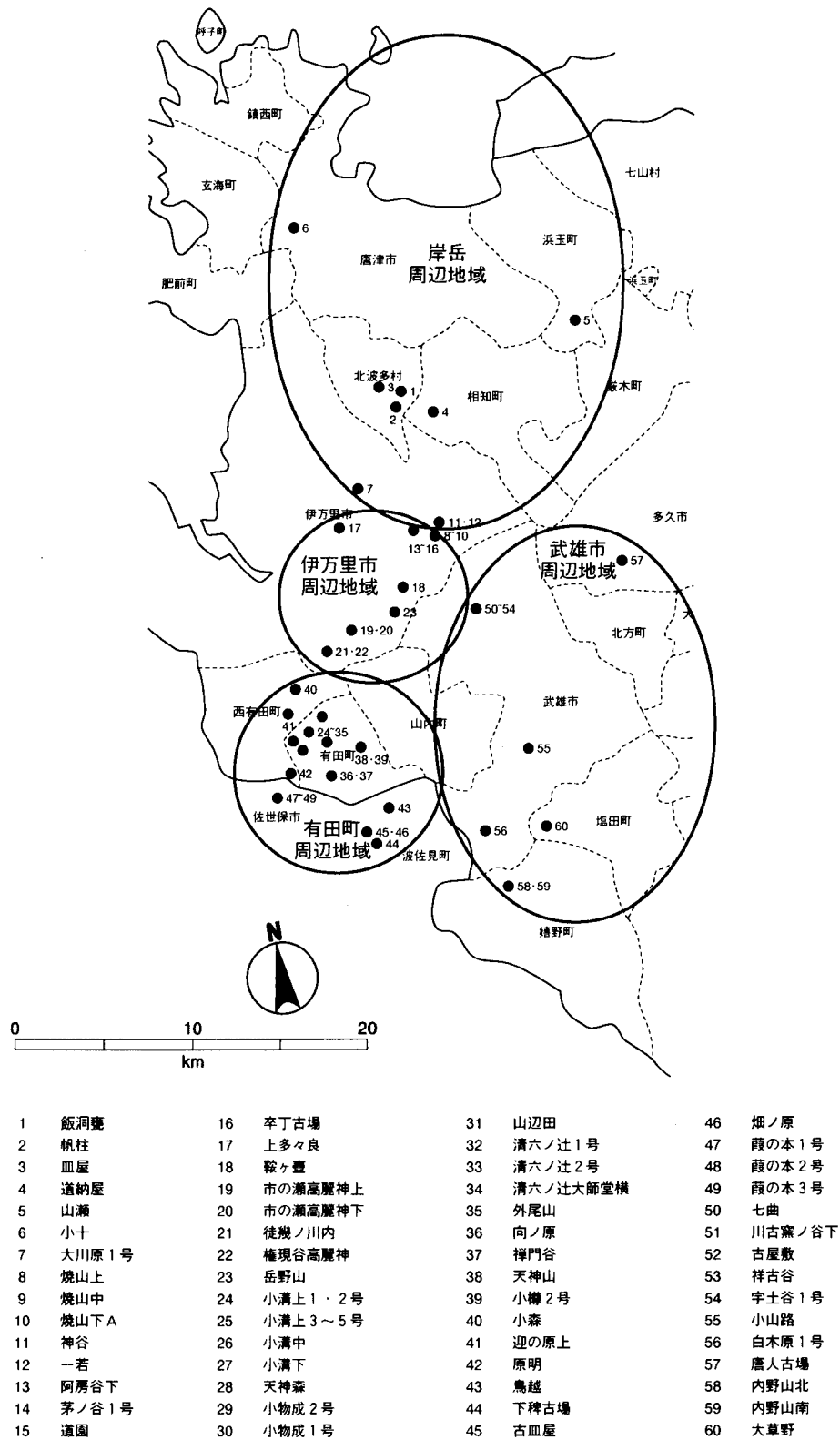


図1 初期の主な窯跡分布図

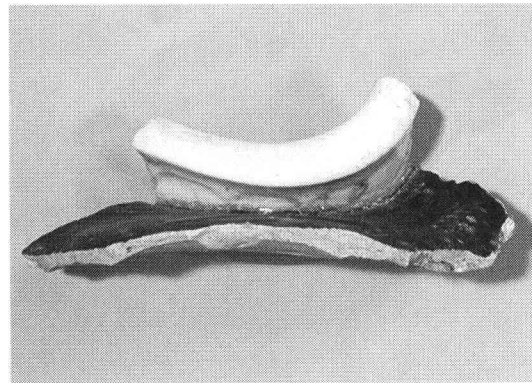
ただし、これはあくまでも現在の資料で区分できる範囲であり、「多久古唐津」のように一定の近似性を抽出できなかったものもある。今後、調査・研究の進展に合わせて、地域の細分や範囲の再調整も含め、柔軟に対応していく必要があるだろう。

ところで、肥前の初期の窯業には、磁器という、もう一つの生産の柱がある。しかし、これには陶器に類するような系統分類が試みられた例がない。分類できるものなら試みてもいいが、残念ながら必要性もないし、することもできない。なぜならば、肥前の場合、磁器は生産システム上独立して存在したものではないからである。いわば、特定の陶器生産技術の産物といえる。それは先の技術系統分類では「平戸古唐津」にあたり、有田町の窯場で具現化された。同じ朝鮮半島の技術基盤の上に、中国製の技術を一部付加することによって、表層的には一見中国風な磁器を考案したのである。したがって、

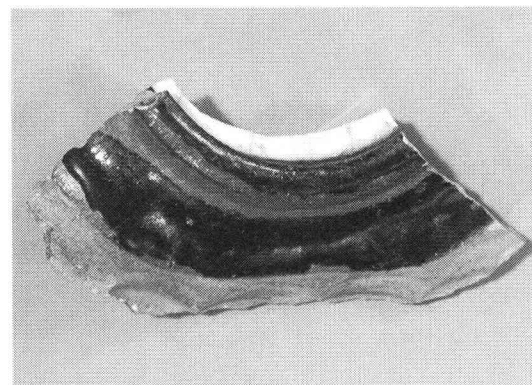
大体的には、陶器は李朝の生産技術に日本的な嗜好を被せたものといえるし、磁器はその間にさらに中国の技術を挟み込んだもの、という位置付けができる。よって、陶器窯、磁器窯と区別されることもあるが、肥前の場合には、実質的には単なる生産品の違いに過ぎない。もちろん同じ生産システム上の製品であるため、同じ窯の、同じ焼成室で、しかも同時に焼成される。この関係の理解には、写真1を示せば十分であろうか。体部は内面にあて目痕を残す鉄釉陶器、口頸部は染付磁器製の壺である。つまり、多元的な源流を持つ陶器と異なり、磁器は遑ればすべて一元的な原点に帰着する。これは日本陶磁器という視点にシフトアップしても、そのまま適用できる。

ところが、肥前の生産技術は、地域を問わず李朝のそれがベースとなっている。そのため、質差はあるとはいえ、基本的な親和性は極めて高い。技術は簡単に源流の垣根を超えて、比較的簡易に移動・融合されるのである。たとえば、磁器の生産技術が肥前以外の他産地に移植される場合には、通常、ひと塊のセットとして技術が動く場合が多い。そのため、窯体構造や窯道具などをみれば、肥前から技術が導入されていることは一目瞭然である。しかし、肥前の中では、その原理が適用できるとは限らず、有田町周辺地域の技術の部分的な追加程度、つまり、別な土台の上に部分的な要素を仮置きした程度で、磁器のカテゴリーを追加できる。

古屋敷窯跡⁽²⁾(武雄市)では、窯の焼成室床面には目積みしない鉄絵大皿が残されており、物原からは胎土目積みの鉄絵皿などとともに磁器も出土している。後述するが、窯詰めの際の胎土目積みや目積みしないもの、鉄絵などの技法の組合せは、「胎土目積み段階」の技術に含まれるもので



[外面]



[内面]

写真1 染付・鉄釉壺 (小溝上窯跡/有田町)

ある。有田では、この段階に続く「砂目積み段階」に至ってようやく磁器生産の技術が確立されるため、ごく常識的に考えれば、武雄市の窯場の方が磁器生産の開始が早いことになってしまう。しかし、そこが生産技術の個性なのである。新興の産地である有田町周辺地域では、「砂目積み段階」への生産技術の移行は、地域全体で、しかも素早く行われている。ところが、「胎土目積み段階」の中心の産地である伊万里市内や武雄市周辺地域では、伝統的な「胎土目積み段階」の技術が根深く継承されたというカラクリである。もちろん、本来、この「胎土目積み段階」の技術の中には、磁器生産のノウハウは含まれていない。しかも、「胎土目積み段階」の技術ですら、すでに両地域の違いは大きい。しかし、それでも何とかするのが、肥前の各地域の生産技術の関係なのである。

こうした状況を認識すれば、「窯」単位の技術系統配置が、無謀なことはいうまでもなからう。肥前の生産技術は、「窯」を構成する微細な技術要素単位で動いてしまう。よって、一つの製品の中にも、多様な技術が混在していることも珍しくない。

(2) 時期区分と技術変遷のメカニズム

肥前の初期の陶器に現れる一つの生産技術的な要素で、今日最もよく知られているのは窯詰め技法であろう。その所以は、これが最も基本となる時期区分の柱として認知されているからであり、生産・消費の現場を問わず比較的容易に客観的な判別が可能である。よって、広く認識を共有するための指標としては極めて有効である。

●窯詰め技法とは、文字通り焼成の際に窯詰めする方法のことであり、詳細は後に述べるが、通常製品から判別できるものとしては大きく二つの種類に分けられる。

一つは、個々の製品間に「目」を挟んで、同様な製品を直接重ね焼きする「目積み」と称される方法で、焼成後には目の痕跡が残る。この目積みには用いる素材にはいくつかの種類があるが、肥前全体で網羅的に用いられ、生産量の多い皿類に配されるため時期区分の基準として活用されているのが、「胎土目」(写真2)と「砂目」(写真3)である。胎土目は、製品と同質の粘土を丸めて目としたもので、厳密に言えば、この目の形状や配置などにも地域差や窯差が表れる。同様に砂目は砂を丸めて団子状にして配したもので、これにも時期差や技術差が反映される。

もう一つは、こうした目積みを行わず、窯の焼成室内部に「トチン」や「ハマ」と称される焼台を並べ、その上に一点ずつ製品を載せて焼成する方法である(図7)。トチンは円柱形の粘土の両端を平らに延ばした側面「エ」字形の道具で、ハマは一般的には平らな円盤形を呈す。この方法では目跡が残らないため、目積みと区別が可能である。

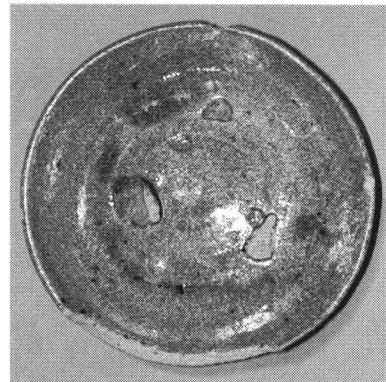


写真2 胎土目積み皿
(小溝上窯跡/有田町)

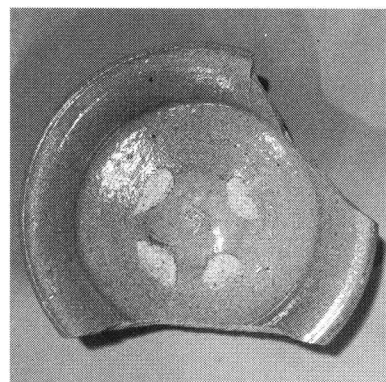


写真3 砂目積み皿
(小溝上窯跡/有田町)

こうした窯詰め技法には時期的に一種の流行があり、それらが中心的に利用されている時期を区分することにより、年代的な指標として活用できるという仕組みである。早い順に「目積みしない段階」⁽³⁾、「胎土目積み段階」⁽³⁾、「砂目積み段階」に区分される。実年代は、「目積みしない段階」と「胎土目積み段階」の間は特に明示された記述はないが、一般的な認識としてはおおむね「目積みしない段階」が窯業の成立～1590年代、「胎土目積み段階」が1590～1600年代、「砂目積み段階」については1600～1630年代の時期が与えられている。ただし、近年では研究の進展によって、「胎土目積み段階」と「砂目積み段階」の接点を1610年代とする認識が定着しつつある。

また、この段階設定は、各時期に用いられた窯詰め技法の多寡を基にしているため、実際には、各々の前半と後半では、かなり組成の違いが大きくなる。これをまとめると、大体的には以下のとおりになる。

1) 目積みしない段階 (窯業成立～1590年代)

……ほとんど目積みが行われていない段階

2) 胎土目積み段階前半 (1590年代後半～1600年代)

……胎土目積みが多いが、目積みしないものや砂目積みなど、多様な技法が混在した段階

3) 胎土目積み段階後半 (1600年代～1610年代)

……胎土目積みが主体となる段階

4) 砂目積み段階前半 (1610年代～1620年代)

……胎土目積みと砂目積みが混在する段階

5) 砂目積み段階後半 (1620年代～1640年代)

……砂目積みが主体となる段階

ところが、この窯詰め技法による時期区分にも運用上考慮すべき点があり、かつてのように大雑把な年代観しか要求されなかった頃には大きな混乱はなかったが、現在のようにより細かい年代観によって研究が進められるようになると次第に歪みが生じるようになった。

この年代区分を示された大橋康二氏の論考を引用すれば、この時期区分の根拠となっているのは次のような点である。⁽⁴⁾

「古唐津の窯跡で比較的古い年代と言われている一群は佐賀県北波多村の岸岳城を中心に分布する飯洞甕、帆柱、皿屋、山瀬などの諸窯であるが、これらの窯詰め方法をみると甕などは貝を底面に置いて焼くが、皿などは重ね積みすることは少ない。(中略)

この胎土目積みは伊万里から有田・武雄地方にかけての唐津窯に一般的となる。「絵唐津」と呼ぶ鉄絵で草花や鳥などを力強い筆致で描く皿類の重ね積みはほとんどこの胎土目を用いている。

西有田町原明窯や有田町山辺田窯、天神森窯などの調査によって、胎土目積みが砂を団子状に固めた砂目積みに移行することが明らかになり、この砂目積を用いる窯のうちに磁器を焼成する窯があることが確かめられている。」

つまり、肥前全体を網羅的に概観しその変遷を捉えたものであり、前項で記した地域差・窯差などの視点は折り込まれていない。したがって、緩やかな「流行」を捉えたものだと考えるべきであ

り、個々の製品などでは、絶対的な前後関係を規定するものではない。しかも、あくまでも生産工程に関わる技術的要素の一つであり、消費者を意識した製品の装飾技法などとは、流行の質が異なる。製品のように、肥前全体で一斉に移り変わるものではないのである。

製品の装飾技法や器形などは、それが商品である以上、消費者の嗜好には極めて敏感である。また、当然のことながら、並立する肥前の窯場全体で、波はあるとはいえ流行に合せた製品が生産される傾向も強い。ところが一方で、背後に控える生産工程に関わる部分は、ある面では極めて保守的である。時の流れとともに部分的な調整は図られても基本的には受け継がれ、急激に基幹部に及ぶ変革が施されることは少ない。

その一つの要因として、客観的にみればたとえそれが非効率であっても、習熟度による差なども考慮する必要がある。必ずしも技術としての効率性の高さと生産性の高さは一致しないのである。その一例が胎土目積みと砂目積みであり、客観的な技術効率では砂目積みが勝るが、前述した古屋敷窯跡のように、磁器など「砂目積み段階」の技術と「胎土目積み段階」の技術が「併存」する。さらに、⁽⁵⁾武雄市周辺地域でも縁辺に位置する塩田町の大草野窯跡などでは、溝縁皿と称される「砂目積み段階」固有の器形に、鉄絵を施し、胎土目積みするなど、両段階の技術が「融合」した製品なども生産されている（写真4）。

また、茶陶をはじめとした製品などでは、技術の向き不向きも関係するだろう。たとえば、有田町周辺地域の窯業は磁器という先進的な技術を内包している。しかし、逆に素材間で階級差が設けられているためか、陶器に関しては画一的な量産品を指向しており、陶器という素材で多様な手法が駆使される「胎土目積み段階」の技術にはとても及ばないのである。

地域別に窯場の資料を概観すると、実際に各地域ともに窯詰め技法はそれほど急速に変化していない。たとえば、岸岳周辺地域の窯場では、終始目積みしない製品が主体を占めるし、伊万里市周辺地域では胎土目積み主体の窯場は多いが、砂目積み主体の窯場はわずかである。しかし、有田町周辺地域では、逆に「砂目積み段階」に窯場が急増する。また、武雄市周辺地域の場合は、伊万里周辺地域に近似する窯場と有田町周辺地域に近似する窯場が混在する。

つまり、窯詰め技法の変化とは、各地域や既存の窯場が歩調を合わせて変わるというよりも、大体的には地域そのものの窯業の盛衰と深い関係がある。特定の窯詰め技法を主体とする地域が、ある時期肥前の先導的な地位を占めることにより、その地域の窯場は増加するし、ほかの地域でも部分的な歩み寄りが行われ、窯場そのものが減少するような状況もあったものと推定される。

具体的には、「目積みしない段階」とは、岸岳山麓周辺に生産の主体があった時期である。ただし、まだ生産規模は小さく、この段階の製品が、窯跡以外でまとまって出土することは少ない。また、この段階の皿の器形は、口縁部に段を付さない丸皿が多く、鉄絵を施すものも少ない。

「胎土目積み段階前半」は、文禄・慶長の役などを通じて、伊万里市周辺地域にその核が移った時期である。つまり、朝鮮半島から導入された多様な技術が直接定着し、しかも岸岳山麓の技術も



写真4 鉄絵胎土目積み溝縁皿
(大草野窯跡／塩田町)

拡散した時期であるため、この段階には実際には多様な窯詰め技法が混在する。たとえば、阿房谷窯跡⁽⁶⁾のように、同じ窯の焼成室床面で、目積みしない皿と胎土目積み皿、砂目積み皿、陶石目積み皿が併存しているような例すらある。製品は、緑色の灰釉と透明釉の差が比較的明瞭であり、鉄絵も多い。ただし皿の場合、鉄絵は丸皿よりも透明釉を掛けた折縁皿に配されることが多い。

「胎土目積み段階後半」とは、生産技術が広く拡散し、有田町周辺地域や武雄市周辺地域が一つの窯業地域として一定の規模を確立した時期である。こうした間接的に定着した窯業では、朝鮮半島から導入された技術の一部が伝わり独自に膨らむため、技術的にはやや画一的な傾向がある。たとえば、最も「胎土目積み段階」の認識が容易なのは、有田町周辺地域の窯業であり、陶器皿はほぼすべて胎土目積みが行われている。皿の器形も画一化が進み、基本的に丸皿と折縁皿がセットになる。また、灰釉と透明釉の差は希薄になり、鉄絵は器形と関係なく配されるようになる。

次に「砂目積み段階前半」とは、磁器が創始され、有田町周辺地域の窯業が力を持ちはじめた時期である。有田町周辺地域では、一つの窯の中で胎土目積みから砂目積みへ移行する例が多いように、急速に転換が図られた。しかし、ほかの地域では、まだ相対的に胎土目積み段階の技術を強く引きずっていた。そのため、消費遺跡などでは、胎土目積み製品が比較的多く見られる。皿は溝縁皿が基本となるが、胎土目・砂目の折縁皿も比較的多い。また、明確な灰釉は少なくなり、透明釉が主体となる。さらに、鉄絵を施すものも少なくなる。

「砂目積み段階後半」とは有田町周辺地域の窯業の影響が広まり、砂目積みが主体となった時期である。しかし、1630年代以降の窯とみられる伊万里市の岳野窯跡⁽⁷⁾などでは、まだ胎土目積み製品も認められ、部分的には古い技術も残っていた。有田などでは佐賀藩の政治的介入により、寛永14年(1637)頃には陶器生産自体が廃止されたが、ほかの地域では、一定の期間継承されている可能性が高い。製品は灰釉がほとんどなく、透明釉が主体となる。皿はさらに限定され、溝縁皿の割合が高くなる。

つまり、消費遺跡などでは全体的には数量差として現れるが、どこの地域や窯場の製品が流通しているかによってもその見え方は大きく異なってくる。したがって、場面によってはこうした生産状況を十分に加味した上で、資料を取り扱う必要性が生じるのである。

②……………岸岳山麓の窯業の技術的位置付け

(1) 肥前の窯体構造と岸岳山麓の窯場の特徴

肥前の近世陶器は、まず岸岳山麓の窯場で誕生した。古くからいわれてきたことではあるが、実は現状では断定できるだけの直接的な証拠はみつかっていない。ただし、消費遺跡における製品の出土状況や他の地域と比較した技術差、あるいは歴史的な背景などを考慮すれば、ほかには該当する候補が見当たらない。また、肥前の近世陶器は「唐津」と総称され、通常、「積み出し港名から冠された」などと解説されるが、実際には各藩内の港から搬出されている。これも、「当初岸岳山麓で窯業がはじまった頃、領内の唐津の港から積み出されたから」と考えれば矛盾がない。これは、有田で誕生し「伊万里」と称された、肥前磁器と同じである。

岸岳山麓では、これまで北波多村5ヶ所、相知町3ヶ所、計8ヶ所の初期の窯場跡が発見されて

いる(図3)。特に窯体が密集する状況はなく、おおむね一基ずつ山中に点在する。この中で、すでに飯洞⁽⁸⁾甕上(図4-4)・飯洞⁽⁹⁾甕下(図4-1)・帆柱⁽¹⁰⁾(図4-5)・皿屋⁽¹¹⁾(図4-2)・皿屋上⁽¹²⁾(以上北波多村)・道納屋⁽¹³⁾(図4-3)(相知町)の6窯跡の発掘調査が実施されており、残すは大谷窯跡・平松窯跡(以上相知町)に過ぎない。調査された窯の中で、おそらく前から4窯跡は階段状割竹式登り窯と推定され、皿屋上窯跡は無段式の単室穴窯であることが判明している。道納屋窯跡も割竹式かとは思われるが、階段状連房式登り窯の可能性も残る(図2)。

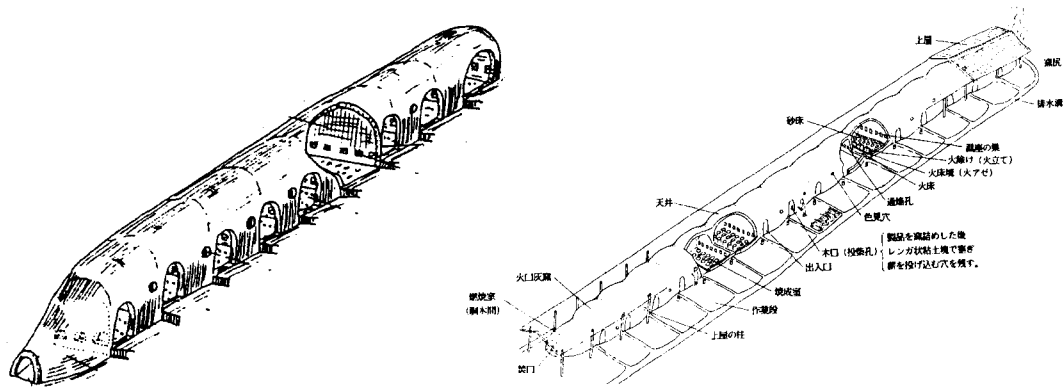


図2 割竹式登り窯(左)と連房式登り窯(右)の模式図(註12より転載)

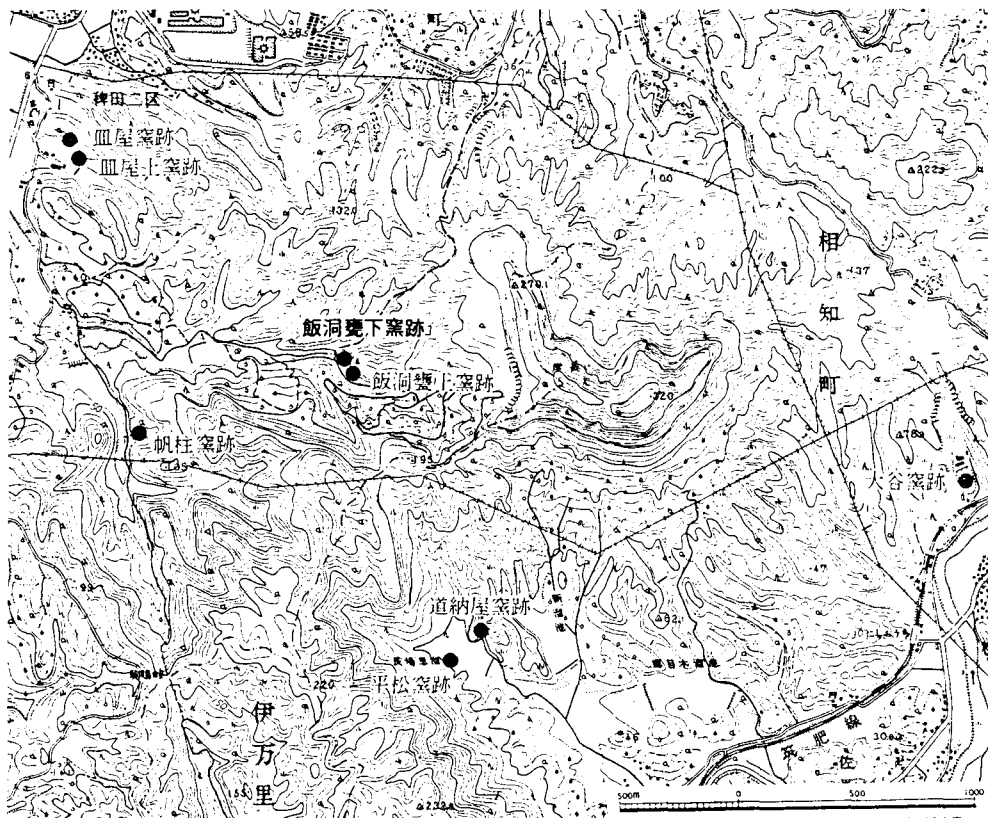
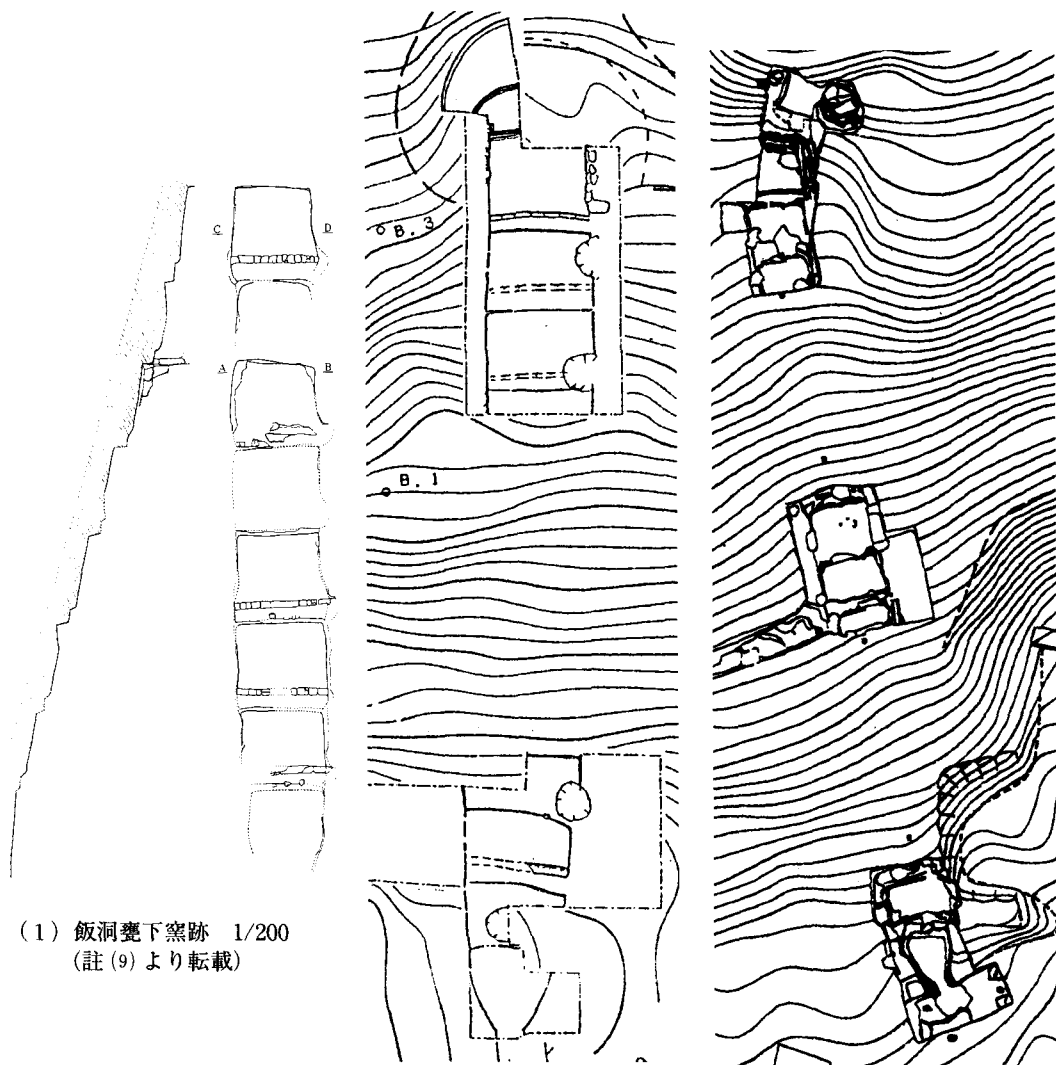


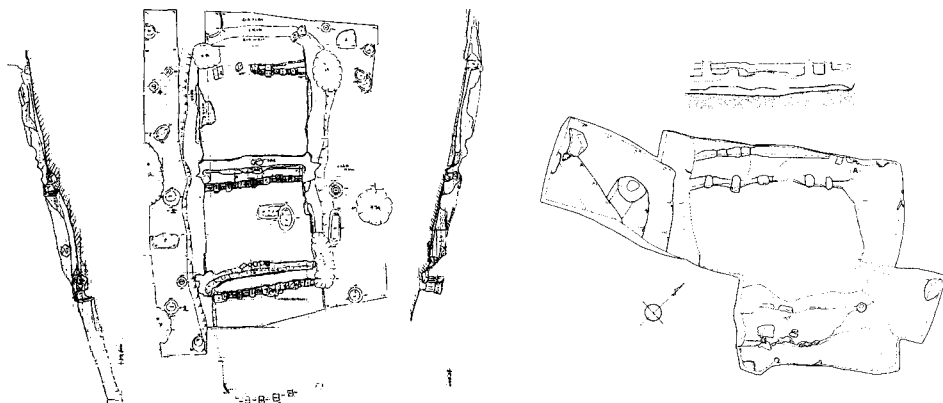
図3 岸岳山麓付近の窯跡分布図(註9より転載)



(1) 飯洞壘下窯跡 1/200
(註(9)より転載)

(2) 皿屋窯跡 1/200
(註(12)より転載)

(3) 道納屋窯跡 1/200
(註(13)より転載)



(4) 飯洞壘上窯跡 1/100 (佐賀県肥前古陶磁窯跡保存
対策連絡会『肥前古陶磁窯跡』1999より転載)

(5) 帆柱窯跡 1/100 (註(10)より転載)

図4 岸岳山麓の窯跡

こうした窯体構造については、例外的な単室穴窯を除けば、割竹式から連房式へと移行したと考えられている。ただし、両種の発掘遺構での判別は難しく、まだ周知の識別方法は確立されていない。ただし自身では、窯体の焼成室数及び全長、焼成室間の段高及び個々の段の比高差をはじめとし、いくつかの要素によっておおむね判別可能と考えており、別にまとめたことがある⁽¹⁴⁾。

連房式の場合、団子状の焼成室を順次繋げていく形式であるため、地形の変化に柔軟に対応できる。焼成室を左右にずらせば横の変化にも対応できるし、焼成室間の段高を変えることによって縦の変化にも対応できる。そのため、相対的に大形の窯を築くことが可能である。ところが割竹式の場合は、側壁や天井部のラインが直線的であるため、その許容量が狭い。しかも、初期の窯は規模が小さく天井高も低いため、焼成室前部側面に設けられた出入口高を確保するため、焼成室間の段高を押さえる必要がある。たとえば、上野系の菜園場窯跡⁽¹⁵⁾（福岡県小倉市）は、肥前とほぼ同形式、同規模の窯で、遺存状態から割竹式であることが確認できる。この窯の場合、天井高は奥壁部分で1.2mほど、焼成室間の段差は十数cmと低いが、出入口高は65cmほどに過ぎない。これは大人がようやくしゃがんで出入りできる程度の高さである。

まとめると、割竹式の条件としては、おおむね以下の点などを満たしている必要があり、連房式はその逆となる。

- a) 全長が短く、焼成室数が少ないこと
- b) 焼成室間の段が低く、部屋による高差も少ないこと
- c) 出入口高をより確保するため、火床が深く掘り込まれていること
- d) 側壁のラインが直線的なこと

これに当てはめてみると、たとえば連房式と推定される「胎土目積み段階」の小溝上1号窯跡⁽¹⁶⁾（有田町）の場合、焼成室数は不明であるが全長は66m、焼成室間の段差は調査部分で最高96cm、最低40cm、その差は56cmに及ぶ。また、火床は砂床よりも掘り込まれているが、深さは最高で10cm程度である。一方、割竹式と推定される飯洞甕下窯跡の場合、焼成室数7室で全長18.4m程度、焼成室間の段高は最高35cm、最低16cm、その差は13cmに過ぎない。また、火床の深さは8cmと特に浅い部屋もあるが、その一室を除けば最低16cm、最高21cmで、平均すれば18.4cmとなる。つまり、両窯の差はかなり大きいですが、肥前全体を見渡しても比較的その差は明瞭で、道納屋窯跡を除けば、ほとんど中間的なものは見当たらない。

全体を通して、連房式の場合、通常、全長が30mを降ることはない。しかし、割竹式と推定される一群では、最長で20m程度である。焼成室数も前者が10室台後半～20室台前後であるのと比べ、10室前後と少ない。段高も、連房式では部分的に1.0m以上に達する窯もあるが、同様にまったく段差のない焼成室を持つ窯もあり、窯差も大きい。しかし割竹式では、最高でも30cm台程度である。火床の深さも、連房式では10cmを大きく超えることはなく、まったく掘り込まれていないものも多い。一方割竹式では、20cmを超える例が一般的である。これは多少構造上の理由もあり、連房式の場合は焼成室間の段直上、つまり上の焼成室の最前部に隔壁が設けられていることになるが、割竹式の場合、下室の砂床と上室の火床は連続した面に位置し、その間に隔壁が設けられている場合が多い。いわば連房式の段に当たる部分は、上室の火床とそれに繋がる砂床の境となる。

こうした観点から地域別に割竹式登り窯の分布を概観すれば、岸岳周辺地域には類例が多いが、伊万里市周辺地域ではその割合がぐっと少なくなり、武雄市周辺地域では唐人古場窯跡⁽¹⁷⁾（多久市）などの例外に限られ、有田町周辺地域では明確な例がない。

しかも、割竹式は最低二つの種類に分類でき、ほぼ岸岳山麓以北とほかの地域で構造が異なる。岸岳山麓に位置する窯は、焼成室の幅・奥行ともに2m台で、ほぼ平面が正方形を呈することによって一つの特徴がある。しかし、焼山上窯跡⁽¹⁸⁾（伊万里市）や唐人古場窯跡（図5）といった岸岳山麓より南の窯では、焼成室幅は1.5m前後で、部分的に幅に対してかなり奥行の長い焼成室がみられる。

たとえば、飯洞甕下窯跡の場合、焼成室の横幅の平均が2.20m、奥行の平均が2.25mである。しかし、焼山上窯跡は横幅1.48mに対し、奥行1.70mの焼成室があり、唐人古場窯跡にいたっては横幅1.70mに対して、奥行2.80mとかなり極端な部分もある。

ただし南側の窯でも、大川原1号窯跡⁽¹⁹⁾（伊万里市）は、横幅2.39mに対し奥行2.45mと、飯洞甕下窯跡をそのままやや大きくしたような形状を呈する。しかし、この窯の場合は、製品などからみても明らかに岸岳山麓の技術を継承しており、逆に、こうした焼成室の縦横比などは技術の中で規格化されたものであることが分かる。

また、この2種類の割竹式の窯には、奥壁に配した分焰柱の製作方法にも違いがある。岸岳山麓の窯場では、粘土塊を芯としさらに粘土を巻いて造るものが一般的であるが、ほかの地域のタイプでは割石を用いることが多い。ちなみに連房式の登り窯では、粘土塊をそのまま四角柱状に成形したものが用いられる。

割竹式と連房式の間接的な窯とした道納屋窯跡は、焼成室幅2.4m、奥行2.0m、内部構造的にはほぼ割竹式の要件を満たしている。しかし、全長約35m、焼成室数は16室と推定されており、規模の面では連房式の範疇に収まる。生産品などの構成もやや特殊で、後述するように、岸岳山麓の組合せを一ヶ所に寄せ集めたような組成を有している。現状でその位置付けを明確にすることは難しいが、おそらく岸岳山麓の技術で後発の連房式の技術を模した、相対的にやや操業時期の下がる窯と考えるのが妥当な線ではなかろうか。

こうした割竹式や連房式の登り窯は、肥前に窯業が成立する以前には、国内の既存の窯業地で用いられた形跡がない。よって、肥前で確立した窯体構造と考えて間違いない。

この中で、唐人古場窯跡などに見られるような割竹式登り窯については、韓国の李朝時代の碗・

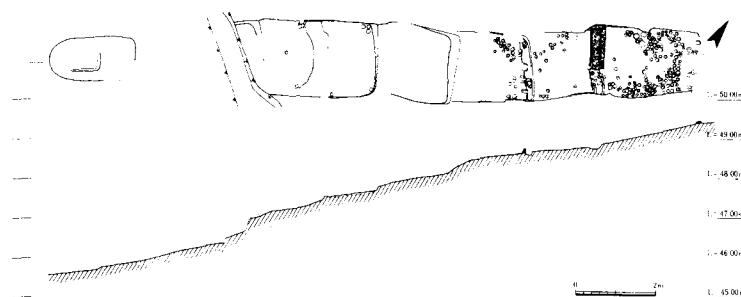


図5 唐人古場窯跡（註17より転載）

皿窯との類似性が高い。たとえば、現在発掘調査されている例では、16世紀はじめ頃の窯と推定されている山本洞窯跡（京畿道軍浦市）（図6）などは比較的近さが感じられる。同様に、全長約15m、幅1.0～1.5mほど、無段式単室穴窯である皿屋上窯跡も、やはり韓国の壺・甕窯に類例が認められるという指摘がある。⁽²⁰⁾つまり、これらの築窯技術は、朝鮮半島南半部からもたらされた可能性が高く、限りなく技術導入期（窯業成立期という意味ではない）に近い段階に築かれた可能性も高いが、構造的には単発的であり、後に継続された例は見当たらない。

一方、岸岳山麓の割竹式の構造は、今のところどこにも類例が探せない。これは連房式も同様で、焼成室の平面形がほぼ正方形を呈することなど、比較的両種の共通性は高い。また、道納屋窯跡などをみれば、両種間の技術面での壁もそれほど厚くないことが分かる。部分的な技術の追加は必要としても、あるいは「胎土目積み段階」という量産化の時代を迎え、岸岳山麓の割竹式の構造から連房式に発展した可能性もあながち皆無とはいえないだろう。

近年では、韓国の窯との構造の違いから、登り窯の技術は中国から導入されたとする考え方も聞かれるようになってきた。しかし、中国の場合は、築窯には全体に磚が用いられ、塗り壁式の朝鮮半島や肥前の初期の窯とは基本的に異なる。また、窯尻に煙突状の施設が付加され煙が上方に抜ける構造になっている中国の窯と異なり、朝鮮半島や肥前では、一般的に煙突がなく窯尻からそのまま横方向に抜ける構造になっている。

したがって、連房式への移行に際して、部分的に中国の影響を享受した可能性はあるにしても、基本的に肥前の窯体構造は、全体を通じて朝鮮半島の技術が基盤となっている可能性は極めて高い。

（2）肥前の窯詰め技法と岸岳山麓の窯場の特徴

肥前では、近世に至って新しい技術が導入され、窯業が成立した。しかし、岸岳周辺地域はもとより、肥前一帯を通してみても、それを受け入れた母体となった既存の窯業は存在していない。また、製品の模倣レベルでは国内の既存の窯業の影響も認められるが、技術レベルでの影響は皆無と考えて間違いない。つまり、海外で完成された技術がそのままセットとして導入され、まったく白紙の状態からのスタートしたのである。

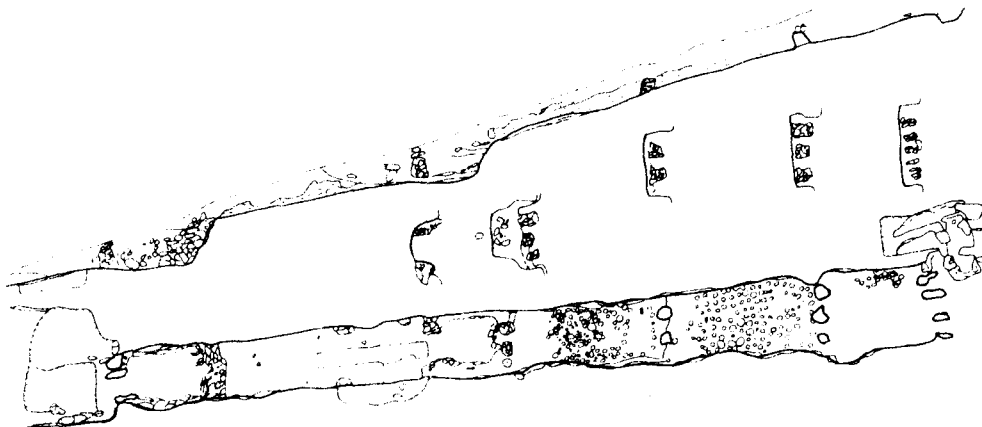


図6 京畿道軍浦市山本洞窯跡（註21）より転載）

当初導入された技術については、古くから北朝鮮地域に源流を求める考え方が大勢を占めてきた。ただし、多くは積極的にというよりも、「岸岳山麓の窯場の藁灰釉製品と類似したものは、これまで唯一咸鏡北道会寧付近でのみ発見されているから」という、やや暫定的な意識も込めた想定であった。ところが近年では、中国の南部でも藁灰釉製品の存在が指摘されるようになり、唯一の選択肢ともいえなくなってきた。

もっとも、これはある面では生産を離れた議論であり、本来、製品の類似性のみでは、技術導入の確実な証しとはなりにくい。なぜならば、製品のスタイル規定には時々の市場ニーズが大きく関与しており、必ずしも生産側が主体性を保持

し、技術をストレートに反映するという形は取られないからである。しかもそうした模倣は、よほど技術的に異質でもない限り、既存の技術内での改良、あるいは部分的な技術の追加程度で賄われる。事実、海外との技術的な結びつきのない国内産地でも、藁灰釉製品が生産されている例は多い。つまり、製品の類似性とは、技術的な影響関係と直結するものではなく、むしろ技術面で関わりのない製品模倣の方が、より類似性としては高くなることが多い。

ところが、前にも述べたように、生産工程に関わる技術は、製品などと比べ相対的にはかなり変化が起りにくい。少なくとも、地域の生産技術に含まれる細かい要素を集成すれば、原形に近い形を復元できる可能性はある。つまり、生産技術の比較は、源流となる窯業を探る一つの有効な方法だと考えて間違いのないのである。ただし、生産工程に関わる技術で、発掘調査資料などから推察できるものはそれほど多くはない。特に普遍的に得られる情報としては、先に示した築窯技術とこれから述べる窯詰め技法に関するものなどに限られてくる。

岸岳山麓の窯場で、主体的に用いられている窯詰めは、目積みせずに1点ずつ焼台に載せる方法である。これは碗・皿などに通有な技法で、壺・甕などでは「貝目積み」(写真5)が一般的である。

焼台であるトチンとハマは、通常は地域を問わず適宜組合せて使用され、ほぼトチンのみを使用する窯も時折みられるが、ハマに偏る窯は肥前全体でも極めて稀である。さらにトチンは「上下端が明瞭に括れるもの」と「括れが不明瞭かまったく括れないもの」の2種類に大別でき、後者は初期の窯場のみで出土する。一般的には、両トチンは一つの窯で併用されているが(図7/清六ノ辻大師堂横窯跡)、岸岳山麓より南の割竹式の窯(同/焼山上窯跡)では、主体的に後者が用いられている。ところが、逆に岸岳山麓以北の窯(同/帆柱窯跡)では、前者が中心となる。こうしたトチンとハマを組合せた窯詰め技法は、既存の国内産地には例がなく、中国などでも一般的ではない。やはり李朝の窯場に通有で、形状なども類似するが(写真6)、韓国の窯場では明瞭に括れるタイプのトチンの例は知らない。しかし、全体を通じて、窯道具やその組合せなどからみても、朝鮮半島との技術の類似性は高く、しかも窯体構造と同様に、少なくとも岸岳山麓より南の割竹式の窯の技術は、韓国の窯場と類似する。

こうした李朝の窯詰め技法については、製品の等級により使い分けられていたことが知られてい

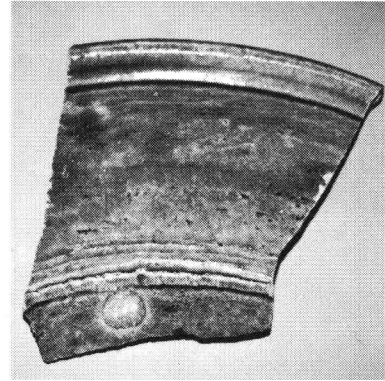
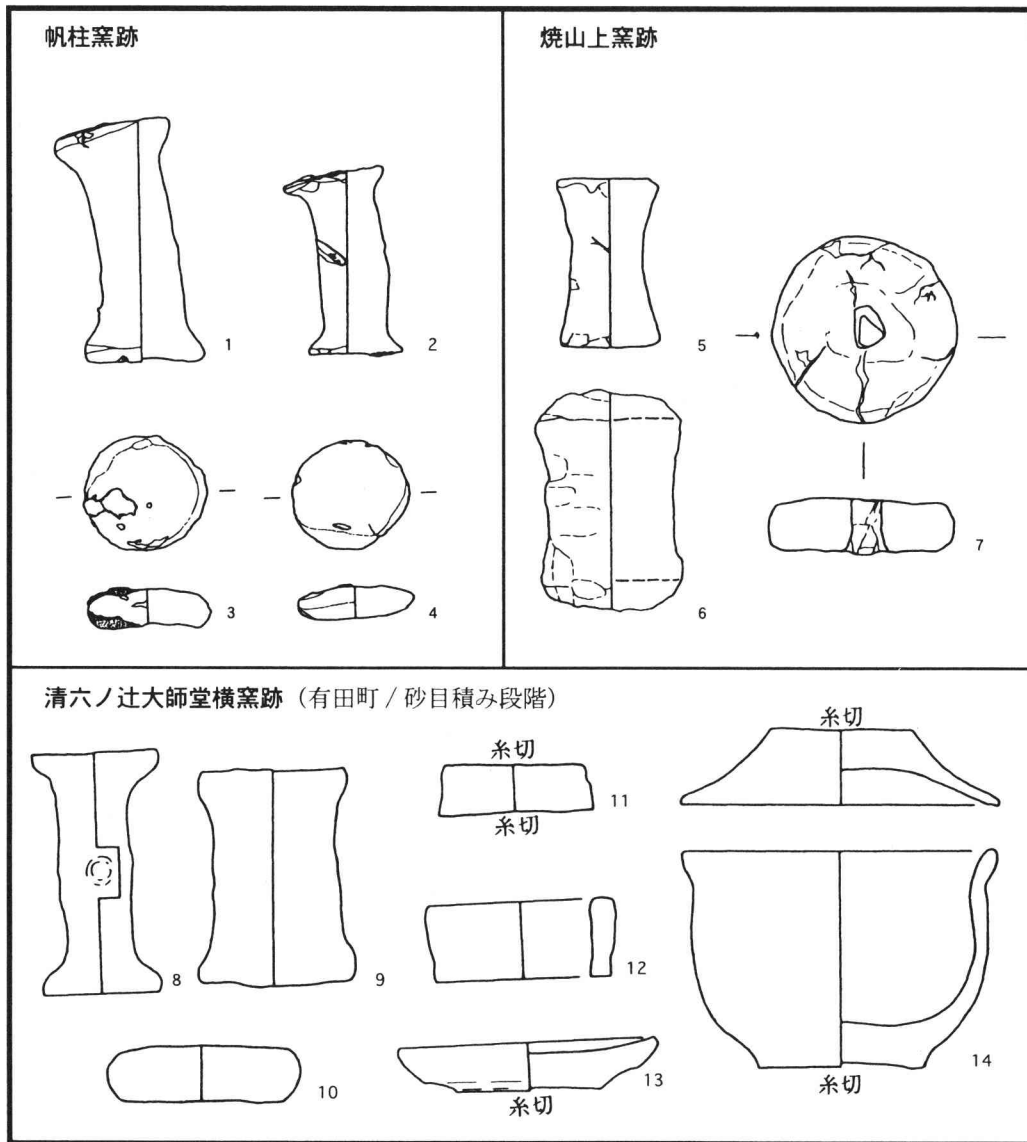


写真5 灰釉甕蓋(貝目積み)
(飯洞甕窯跡/北波多村)



(トチン 1・2・5・6・8・9 ハマ 3・4・7・10～13 サヤ 14)

図7 窯道具の種類

る。羅善華氏によれば、⁽²¹⁾「これらの白磁の上，中，下三等級品の区分はまず，良質の白土を使用しているか否かがその基準となり，第二に焼成方法，すなわち匣鉢の使用，裸焼成，重ね焼きなどで分け，第三に器形の良し悪しで行われる。これは朝鮮朝初期に社会全般に影響を与えた儒教文化の厳格な身分制度によって白磁の使用区分が形成されていたもので，壬辰和乱以前まで保たれていた。例を挙げると王室用は上級品，官需用は中級品，士大夫用は下級品等々である。この三等級の白磁はひとつの窯の中で一緒に焼成されていた。」という。これは，京畿道広州郡一帯に広がる中

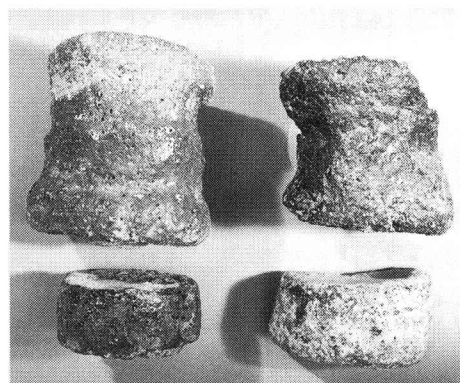


写真6 肥前(左)と韓国(右)のトチンとハマ

中央官窯の白磁生産の例であるため三等級に分けられるが、地方の窯の場合は「中品」と「下品」の二等級の組合せ、ないしは「下品」のみの生産が一般的である。

焼成方法からみた「上品」とは、匣鉢に入れて焼くもので、肥前の中ではやはり例がない。肥前でも匣鉢は多用されるが、それは磁器創始以後、磁器に限って用いられている。次の「中品」が焼台に一点ずつ載せる方法で、つまり岸岳山麓の窯業及び「目積みしない段階」を構成した技術は、この中品生産の技術が基本になっている可能性が高い。続く「下品」が目積みするもので、「胎土目積み段階」の技術は「中品」及びこの「下品」生産技術が反映された可能性が高く、「砂目積み段階」の技術は「下品」の影響が強い。この焼成方法の違いは、目跡の有無、降灰の有無をはじめ製品の質に影響を及ぼすが、相対的にランクの高い焼成方法ほど、窯詰めした際一つの製品の占有面積は大きくなる。つまり李朝の窯業では、基本的に製品のランクによって焼成方法が規定されており、匣鉢を積み上げて量産を行う中国などとはやや発想が異なる。これは肥前の場合、中国の影響の強い磁器生産でも同様であり、原則として匣鉢を積み重ねることはなく、李朝の上品生産窯のスタイルをほぼそのまま実現している。

ところで、李朝の生産スタイルでは、中品生産には下品の焼成方法も併用されるのが常である。したがって、岸岳山麓の窯場でも、全体的には数は少ないながら、壺・甕の貝目積みに加え、碗・皿類でも目積みしたものが認められる。飯洞甕窯跡では陶石目積み（写真7）の例があり、帆柱窯跡や道納屋窯跡では砂目積み（写真8）が認められる。また、岸岳山麓の窯場としては異例であるが、皿屋窯跡では胎土目積み（写真9）が多用されている。

陶石目積みとは、陶石（磁器の原料）状の硬い白石や砂岩等を目としたもので、極めて地域色の濃い目積み方法である。製品は、これまで飯洞甕窯跡を除けば、阿房谷窯跡や神谷窯跡をはじめ、⁽²²⁾「胎土目積み段階」の伊万里市の窯場に集中している。つまり、岸岳山麓で展開された「目積みしない段階」の技術は、一時期、伊万里市周辺地域の「胎土目積み段階」の技術と並行する可能性がある。

胎土目積みは、岸岳山麓の窯場では、これまで皿屋窯跡のみで生産が確認されている。碗・皿類としては、ほぼ藁灰釉製品を専焼しており、皿の見込みの釉を3ヶ所程度方形に拭い、その上に大振りな団子状の胎土目を置いて重ね積みしている。こうした目積み方法は、肥前の中にはほかに例は見当たらないが、上野・高取系の藁灰釉製品には同様な方法が確認できる。特異な技法であるた

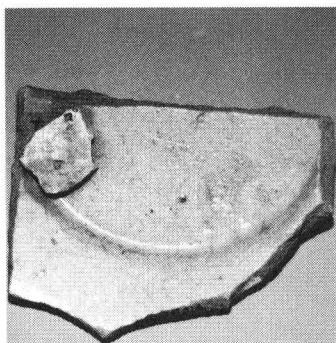


写真7 陶石目積み
(飯洞甕窯跡)

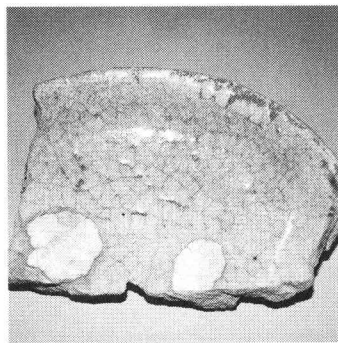


写真8 砂目積み
(帆柱窯跡)

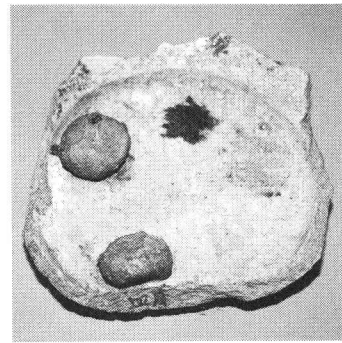


写真9 胎土目積み
(皿屋窯跡)

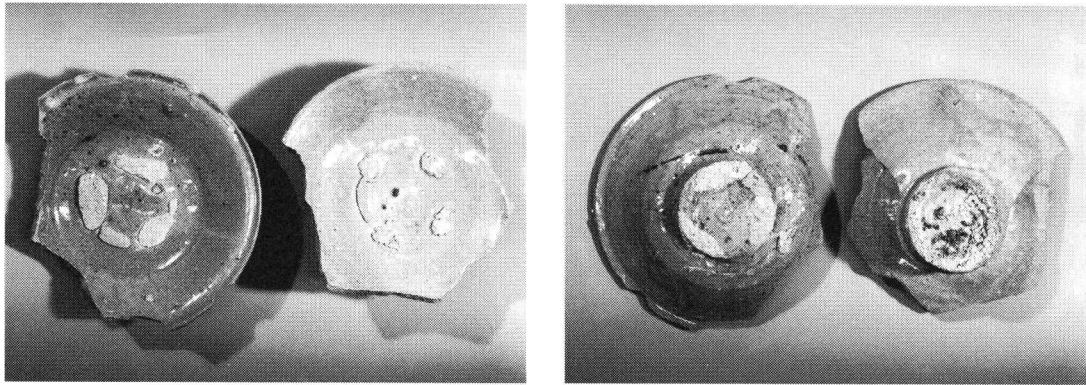


写真10 肥前（左／小溝上窯跡）と韓国（右／慶尚南道河東郡白蓮里）の砂目積み皿（内面／外面）

め、一般的な胎土目積みと同列には扱えないが、藁灰釉という焼成の際に流れる釉を意識したものとも考えることができる。実際に、例外的には、小さめの円錐形の胎土目を高台直下に配し、見込みの釉を拭わずに重ね積みしているものも出土している。この胎土目の形状や配置も、実は、主として伊万里市周辺地域の「胎土目積み段階」の窯場で多用されており、しかも、ほかの地域で主体を占めるものとは多少傾向が異なる。

砂目積みは、時期区分の最後に設定されているため誤解されがちだが、ほかの窯詰め技法と比して、技術の導入時期が遅れるということではない。細分すれば、砂目積みにも4種類以上あり、岸岳山麓の窯場の砂目は、「砂目積み段階」の砂目（写真3・10左）とは種類が異なる。岸岳山麓の窯場の砂目は、泥質の細砂を用い、円形に近い形状を持つ。しかし、「砂目積み段階」の砂目は、やや荒い砂を用い、不定形で各目の大きさも一定していない。そのほか、やや荒い砂を用いるタイプとして、比較的大きめで楕円形を呈すものと、比較的小さく円形に近いものが確認できる。こうした砂目は、主体としては、伊万里市周辺地域の「胎土目積み段階」の窯場で類例が多い。また、ほぼ同段階の窯場と推定される小十窯跡⁽²³⁾などでも多用されており、武雄市の窯場では、「砂目積み段階」の象嵌・刷毛目製品に例が多い。ようするに、同じ砂目積みであっても、その源流となっている技術は、複数あったものと推定される。これは砂目積みに限らず、目の形状や配し方などに多様性の認められる胎土目積みなどでも同様である。

李朝の窯場でも、こうした砂目積みは一般的である。しかし、目の配し方や砂の種類などには地域性が認められる。これまでのところ、岸岳山麓の窯場のタイプについては類例を探せないが、その他のタイプについては、韓国の南部、慶尚道や全羅道あたりの窯場で用いられているものが（写真10）、最も近似性が感じられる。

③……………近世窯業の源流と成立時期

（1）岸岳山麓の製品組成と技術の源流

肥前の初期の陶器に用いられた主な釉薬には、藁灰釉、長石釉、灰釉、透明釉、鉄釉などの種類がある⁽²⁴⁾。基本的には、原料の違いというよりも調合の違いであり、藁灰釉から藁灰分を抜けば、

ほかの釉薬を作ることができる。また、施文技法として、鉄絵は「胎土目積み段階」を中心に多用されており、象嵌・刷毛目などは「砂目積み段階」に武雄市の窯場を中心に使用されている。

岸岳山麓の窯場では、飯洞甕上・下窯跡が緑色の灰釉と白色の長石釉の碗・皿主体、帆柱・皿屋窯跡が藁灰釉の碗・皿主体、道納屋窯跡はそのいずれも多く、皿屋上窯跡は鉄釉の壺・甕・瓶類が主体となる。ただし、碗・皿を中心とした窯場でも、通常、鉄釉をはじめとした小形の瓶・壺・甕類などは生産されており、さらに飯洞甕窯跡でも藁灰釉製品、帆柱窯跡では灰釉・長石釉製品が、いくらかは出土・採集されている。

こうした組成から、岸岳山麓の窯場に特異な点としては、まずは、藁灰釉製品の専業窯が存在することがある。これに近似する窯は、茅ノ谷1号窯跡⁽²⁵⁾など伊万里市周辺地域でも知られているが、主として袋物類の口縁部の装飾釉（いわゆる朝鮮唐津）として用いており、岸岳山麓の窯場のように製品の全部位の釉が藁灰釉状に流れているものや、碗・皿類に使用した例は比較的少ない。よって、茅ノ谷1号窯跡の場合、極端な瓶類偏重により藁灰釉主体となっているが、皿類などには透明釉も用いられている。つまり、本質的な藁灰釉製品の専業窯は、やはり岸岳山麓だけとなる。

もう一つは、明確な透明釉製品がほとんど見当たらないことである。この透明釉は、ほかの地域ではごく一般的であり、鉄絵は、通常この透明釉製品に施される。したがって、飯洞甕窯跡や道納屋窯跡では、長石釉製品でいくらか鉄絵を施したものが出土・採取されているが、それほど数は多くない。逆に明確な長石釉は、岸岳山麓及び同系の窯場以外には例は少ない。つまり、ほかの地域の透明釉に該当するのが長石釉であり、伊万里市の窯などに見られる灰釉と透明釉の組合せに相当するのが、灰釉と長石釉のセットと考えていいだろう。

したがって、単発的な壺・甕専焼窯で、ほかの窯場の流れの中に位置付けられない皿屋上窯跡、相対的に成立時期が降る可能性が高く所在地区も異なる道納屋窯跡、この2窯を除けば、岸岳山麓の基本的な製品組成は、藁灰釉主体と、灰釉・長石釉主体の二つとなる。この二組の、いずれか一方に原点があるのか、あるいは当初から併存したのか、現状では限定はできない。しかし、あえて天秤を掛けるとすれば、まず、原点となる一つの技術が定着し、生産動向に合わせて適宜技術改良が図られた、と考える方がより自然ではなからうか。実際に、製品の種類以外には、両種の窯場に明確な差は認められない。つまり、技術的には同根と考えてほぼ間違いはない。ならば、岸岳山麓に特異な藁灰釉専業窯を先に置くのが、流れとしては無理がない。

灰釉と長石釉は、述べたように他地域の組成と完全にオーバーラップする。長石釉は「胎土目積み段階」に流行した鉄絵も可能で、技術の幅としても広い。飯洞甕窯跡では、方形に変形させた大振りな筒形碗が出土・採集されている。これなども、類例はやはり灰釉と透明釉を基本とする、焼山上窯跡や同下A窯跡⁽²⁶⁾などにみられる。しかし、帆柱窯跡ではこうした茶碗類などは認められない。

釉薬の調合上も、藁灰釉以外は藁灰分を削除する必要がある。他地域の透明釉製品でも、藁灰分が抜けきれず、釉際など部分的に藁灰状の発色を見せるものが珍しくない。飯洞甕窯跡の長石釉製品にも、部分的に釉が藁灰釉状に流れているものがまみられる。帆柱窯跡で出土している長石釉製品も、実際には藁灰釉に近い。つまり、流れとしては、藁灰分は加えるのではなく、抜く方向であったと推定される。よって、後には装飾的な意味合いが強くなるが、当初は灰釉や長石釉など、

流れない安定した釉薬ができなかった可能性もある。少なくとも藁灰釉では、徐々に目積みによる量産体制を指向した、肥前の窯業の流れに乗ることはできないだろう。あるいは、皿屋窯跡の胎土目積み皿は、その苦肉の策とも取れる。

典型的な藁灰釉の調合は、藁灰 40%・土灰 30%・長石 30%⁽²⁷⁾だという。同じく灰釉は、藁灰 0%・土灰 70%・長石 30%、長石釉は、藁灰 0%・土灰 20%・長石 80%である。ちなみに透明釉は、藁灰 0%・土灰 30%・長石 70%で、極めて長石釉に近い。つまり、藁灰分の完全な除去はハードルが高そうだが、そこから灰釉と長石釉の2種類の釉の生成はそれほど垣根が高くない。実際に、帆柱窯跡の藁灰釉製品も、ベースとなる色には長石釉に近い白色系のほか、いくらか灰釉に近い緑色系のものが含まれている。帆柱窯跡ではその差はそれほど大きくはないが、同系で時期的にはやや降る可能性の高い山瀬窯跡⁽²⁸⁾（浜玉町）では、かなり顕著な例も認められる。ただし、帆柱窯でもいくらか灰釉や長石釉製品が認められるように、逆にそれほど大きな時期差も考えられない。

こうした点から、仮に現在発掘されている窯場を位置付ければ、帆柱窯跡を原点とし、灰釉・長石釉系は飯洞甕上・下窯跡、道納屋窯跡、一方藁灰釉系は皿屋窯跡、道納屋窯跡ということになるであろうか。どの程度関連するか不明であるが、一応、窯体の規模もこの順に大きくはなる。飯洞甕窯跡については、詳細は調査報告を待ちたいが、上・下の窯で窯体規模や製品などに大きな差はない。未調査の2窯が不明だが、道納屋窯跡の状況を見る限り、現状では窯業は北波多村側から相知町側に広がった可能性が、より高いようには思われる。

ただし、岸岳山麓の窯場の場合、ほとんど物原らしい物原は形成されていない場合が多い。つまり、一つの窯の操業年代はそれほど長くはなく、通常1m以上も堆積している有田町の初期の窯でも長くとも十数年程度と推測されることから、おそらくは数年以内とみて間違いなからう。よって複数の窯が併存していたとすれば、あくまでも推測の域は出ないとはいえ、生産地として機能していた期間も長くともせいぜい数十年というところではあるまいか。これは、当初から藁灰釉主体と灰釉・長石釉主体の窯場が併存していた組合せをはじめ、すべての窯場を一例にでも並べない限り、大きな差とはならない。実際に、窯による製品の形状差などの乏しさも、岸岳山麓の窯場の操業順を明らかにできない一つの原因である。

こうした岸岳山麓の窯場の技術は、窯体構造や窯詰め技法などから分析してきたように、基本的には、朝鮮半島の技術が源流となっている可能性が高い。しかし、その後導入された技術と異なり、少なくとも現状では、韓国の窯場の中では近似性を求めることができない。問題となるのは、従来から想定されている北朝鮮地域であるが、現在では資料を得ることがほぼ不可能である。

この北朝鮮関係の窯場の資料としては、韓国国立中央博物館の所蔵品と、国立歴史民俗博物館所蔵の『浅原伯教コレクション』が知られている。韓国国立中央博物館の資料については、まだ実見の機会に恵まれないが、一部は書籍で紹介されている⁽²⁹⁾。『浅原伯教コレクション』については、朝鮮半島の一通りの地域の製品は網羅されているが、残念ながらほぼ製品に限られ、北朝鮮地域の窯道具などは不明である。

両資料の中で、藁灰釉製品が確認できる地域は、やはり日本海沿岸の咸鏡北道を中心としている。また、韓国国立中央博物館の資料に西隣りの両江道の例がみられ、『浅原伯教コレクション』には平安北道の資料にも、含めてよさそうなものが1点だけある。しかし、咸鏡北道の中では、特に北

端の会寧郡に限られるわけではなく、鏡城郡や明川郡など広い範囲に分布している。

製品の種類としては、藁灰釉や灰釉、長石釉・白磁、鉄釉などが認められるが、鉄絵を施したものは探せない。やはり、藁灰釉のベースになる色調としては、白と緑の両方が含まれている。多くは施釉は腰部までで、高台内まで施釉されているものは稀である。また、全体的に陶器質のものが多く、明確に磁器の範疇に含められるものは少ない(写真11)。

窯詰め技法としては、わずかに胎土目積みも認められるが、ほとんど製品には目積みの痕跡は認められない。目積みしない窯詰め方法としては、上品と中品の生産方法があるが、陶器質の製品が主体となることや、降灰の認められる製品があること、また、地方窯であることなどを考慮すれば、焼台に1点ずつ載せて焼成された可能性が高い。こうした採集資料に現れる特徴が、どの程度、咸鏡北道一帯の窯業の姿を反映しているのかは知る術もない。しかし、少なくともここから読み取れる特徴は、かなり岸岳山麓のそれと近似していることが分かる。

まず、製品の種類の点では、従来示されてきた藁灰釉に限らず、組合せとしては共通している。また、岸岳山麓でもむしろ特殊であるように、鉄絵の描かれた製品も見当たらない。一見白磁はよけいだが、これは現代の日本的な陶磁器区分を念頭におくからである。ようするに灰釉とは粗質な青磁のことであり、同じく長石釉とは白磁である。誤解されがちだが、陶磁器区分に普遍性はない。国や地域、時代などが違えば、その概念も異なる。ちなみに、現代の日本でいう磁器とは、本質的にはおおむね中国的なものを指す。よって、有田で生産された李朝流の下品白磁は、現代日本の分類では透明釉陶器となる。しかし、同じ技術基盤上に一部中国の技術を付加して開発され、併焼されているものは磁器となる。

施釉の点では、ともに高台無釉を原則としており、稀に高台内施釉製品が認められることも一致している。一般的に、高台内施釉は「砂目積み段階」の特徴とされる。しかし、「胎土目積み段階前半」までの窯場では、むしろいくらか生産されているのが普通である。しかも、時には唐人古場窯跡のように、高台内施釉製品を基本とする窯場すらある。

窯詰め技法の点では、中品生産の技術を基本とし、しかも目積みしたものが少ないことなどに類似性がある。ただし、資料がないため、使用された窯道具の比較まではできない。

以上の点などから、少なくとも現在得られる資料の中では、国や地域を問わず最も類似性は高い。したがって、断定はできないまでも、北朝鮮地域が最も有力な候補であることは動かない。

(2) 近世窯業の成立時期

成立時期についても、それを直接示す物証は発見されておらず、また、暗示するものもそれほど多くはない。かつては鎌倉時代、室町時代をはじめさまざまな説があったが、現状では1580年代後半から1590年代前半の間、波多三河守親が領主として岸岳山頂に城を構えていた頃のある時点

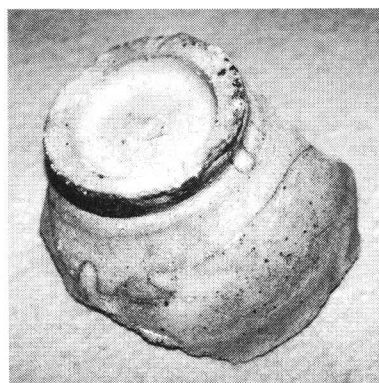


写真11 藁灰釉碗 鏡城郡朱南
面三郷洞 (浅原伯教コ
レクション)

と考えるのが最も矛盾がないように感じられる。

それを検討する資料の中で、具体的な年号の刻まれたものとしては、壱岐（長崎県壱岐郡）の聖母神社に伝わる天正20年（1592）銘の鉄釉茶壺が最も古い。また、紀年銘以外の伝世品としては、天正19年（1591）自刃の千利休旧蔵と伝えられる「子のご餅」銘の筒茶碗も知られている。これらを根拠とすれば、おのずと1591年以前に窯業が成立していたことになる。ただし、寸分の懐疑点もない、というわけではない。ほぼ間違いないとはいえ、鉄釉壺が中国製品ではなく本当に唐津なのか…。筒茶碗が利休の旧蔵品であることは確実なのか…。

消費遺跡の発掘資料の中には、かつてこれらの伝世品を遡る年代の資料として提示されたものがあった。天正元年（1573）炎上の一乗谷朝倉氏館跡（福井県福井市）や、天正16年（1588）に取壊された南蛮寺跡（京都府京都市）の出土資料などである。近年では、堺環濠都市遺跡（大阪府堺市）の天正13年（1585）銘の木札を伴う堀の一括資料などが注目されたこともあった⁽³³⁾。しかし、現在の編年観から察すれば、明らかに後出と考えられる製品を含んでおり、積極的に肯定できるものは見当たらない。

消費遺跡の発掘資料としては、現状でもっともまとまった成果が提示されているのは、大阪市の調査事例であろう。関連調査の件数も比較的多く、個々の発掘調査における出土遺物の量も充実している。さらに、層序による地域の近世前期の編年観が確立していることは、最も不可欠な要素である。層序から「石山本願寺期（～1580）」、「豊臣前期（1580～1598）」、「豊臣後期（1598～1615）」、「徳川初期（1615～1622）」に時期区分されており、わずかながらも唐津が出土するようになるのは豊臣前期のことだ⁽³⁴⁾という。この時期の唐津の出土状況について森毅氏は、「①豊臣後期（1598～1615）の遺物群には多量の唐津焼が含まれるのに対し、前期にはほとんどの調査で唐津が出土していないこと、②前期の唐津とされるものが後期のそれとほとんど区別がつかないこと、③生産地で古いといわれている岸岳系唐津は豊臣後期の遺物群の中に含まれることなどからである。」という理由から、「豊臣前期に唐津焼が出土するという事例自体を疑問視していたこともある。」という。森氏によれば、それまで調査報告書で図や写真が公表されている豊臣前期の唐津は8点（図8）、そのほかには数点出土しているに過ぎないという。しかし「出土例は少ないながらも、豊臣前期の遺物群に唐津焼が伴うことが複数箇所⁽³⁵⁾で報告されており、現在では豊臣前期に唐津焼がごく少量大坂に持ち込まれていたと考えている。」と述べられている。また、豊臣前期の中での出現時期については、「そのことを考える上で重要な資料となるのが、天正十三（1585）年に秀吉によって

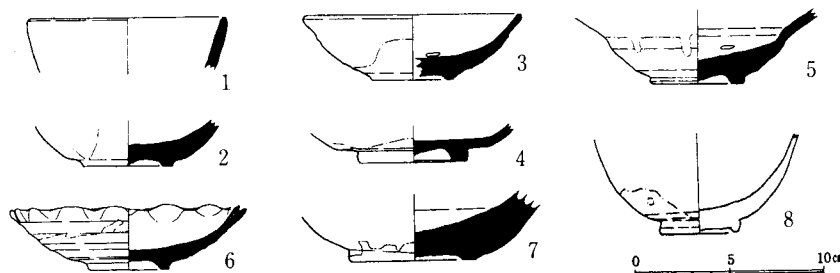


図8 豊臣前期の唐津焼（註33）より転載

焼き打ちされ焼亡する根来寺の資料である。根来寺では大量の陶磁器が出土しているが、天正十三年の焼土層には唐津焼は含まれていない。また、大阪府教育委員会が調査した慶長三年（1598）年の木簡と共伴する遺物群にも、唐津焼はほとんど含まれていない。したがって、豊臣前期の遺構から出土する唐津焼は、その出土数の少なさから類推して、豊臣前期の時間幅の中でも、後半期に出現時期がある可能性が大きいといえるのではないだろうか。すなわち、文禄年間から慶長初年に唐津焼が流行し始めたと考えられる。」と見解を述べられている。

この大坂における唐津の出現時期が、肥前の近世窯業の成立時期と同一視できないことは、もとよりいうまでもない。ごく自然に考えれば、消費地において廃棄に至るには、流通、消費という過程が介在する。したがって、生産時期との間には未知のタイムラグが存在することだけは間違いない。しかも、それまで下地となる流通圏を持たない肥前地域の製品が、窯業の成立直後から大坂へと運ばれた可能性は低いではなからうか。こうした点から推測すれば、近世窯業の成立時期は、大坂における流通からさらに一定期間遡った時期と考えるべきであろう。

ここで注目すべきなのが、豊臣前期に伴う製品と、岸岳山麓の窯場の製品の出土傾向である。大坂で唐津が大量に消費されるようになるのは、豊臣後期のことという。消費遺跡の性格上、この中には前期に搬入されたものも含まれる可能性はあるが、前期の出土状況をみれば、やはり多くは後期に至って搬入されたものと考えべきであろう。これは、慶長の役（1597～98）の際に連れ帰られた陶工によって、生産地としての規模が一気に拡大したことが生産上の要因と推定される。つまり、主体的には「胎土目積み段階」の技術は、ここが起点となる。

ところで、前期の製品を観察すると、皿は基本的に胎土目積みしており、灰釉・透明釉主体で、わずかに長石釉が確認できる。つまり、すでに完全な「胎土目積み段階」の組成となっており、この組成の場合、おそらく最も遡ったとしても歴史背景から文禄の役（1592～93）以降と考えられる。ところが、森氏が「前期の唐津とされるものが後期のそれとほとんど区別がつかない」と指摘されているように、両時期に伴う製品にはそれ自体明確な差は認められない。というよりも、やはり疑ってしまうほど差がない。また、数量は少ないが、前期中での時期変遷を暗示するような差も認められない。したがって、前期の製品も、後期のそれと直結する、慶長3年に近い時期に廃棄された製品である可能性が高い。つまり、大坂に唐津が搬入されはじめたのは「胎土目積み段階」のことで、この段階が確立した時期は、遡っても数年の間に絞られてくることになる。

ここで問題となるのは、「岸岳系唐津」は豊臣後期の遺跡群で出土するという指摘である。たとえば、OJ92-18・SK505⁽³⁵⁾（図9）は、慶長3年に開発された船場の町屋の最初の遺構面で検出されたゴミ穴の出土資料で、製品組成などからも豊臣後期の中でも相対的に古い段階に位置付けられている。この資料は「胎土目積み段階前半」の組成を示しており、碗・皿などでは、目積みしないもの、胎土目積み、陶石目積みなどの製品が混在している。生産地域としては伊万里市周辺地域の製品を主体としているが、岸岳山麓の窯場の製品と推定されるものもいくらか含まれている。

岸岳山麓の製品の種類としては、長石釉製品が最も多く、中に鉄絵を施したものもある。ほかには黄色に近い灰釉を施した貝目積みの甕があり、灰釉製品の中にも可能性の残るものが認められる。つまり、灰釉・長石釉を併焼する窯場の組成であり、飯洞甕窯跡の出土・採集資料に類例のあるものが、いくらか含まれている。よって、「胎土目積み段階」と岸岳山麓の「目積みしない段階」の

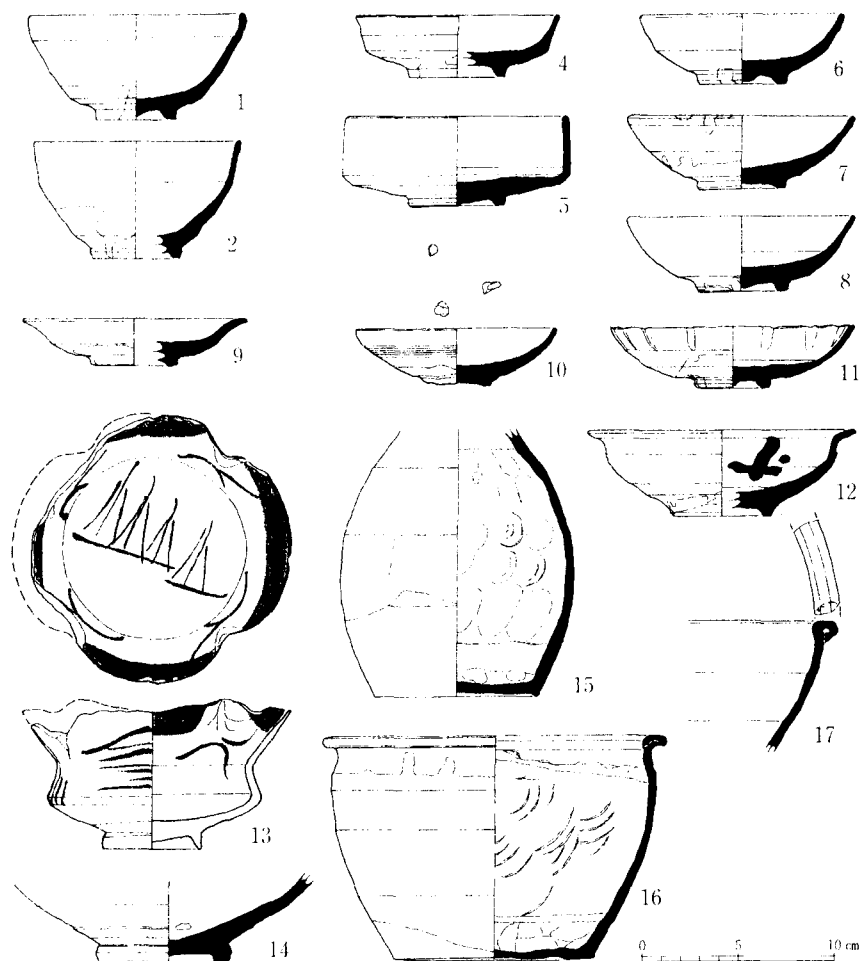


図9 OJ92-18・SK505出土の唐津焼 (註33より転載)

組成は、一時期併存関係にあったと考えて間違いないだろう。また、こうした組成の製品は、素直に考えれば慶長3年以降に搬入されたと捉えたいが、大坂への唐津の搬入時期を考慮しても、遡っても慶長3年の数年前ということになるだろう。

一方、ここでは藁灰釉製品も散見される。ところが、伊万里市の窯場の製品と類似するものは散見されるが、明確に岸岳山麓の窯場に類例がみられるようなものは認められない。また知る限りでは、大坂では帆柱窯跡や皿屋窯跡で出土するような、藁灰釉製品を探すことができない。皮鯨手皿などがその例として指摘されることがあるが、大川原1号窯跡をはじめ、やはり伊万里市内の窯場の製品との近さを感じる。一部の資料しか知らないし、出土していないことが窯場が操業していなかったことには通じないが、相対的には帆柱窯跡や皿屋窯跡の下限はやや古く、唐津が大坂に多く搬入される以前のことと考えたい。

しかし、前項で指摘したように、岸岳山麓の窯場は絶対数そのものが少ないため、遡るにも限界がある。全体で十数年程度と考えれば、やはり1580年代後半あたりが上限といえるだろう。下限は、伝世する「子のご餅」や聖母神社の「鉄釉茶壺」を信じれば、1590年前後となる。また、とりあえずそれらを外して、生産技術の源流を北朝鮮地域と仮定すれば、日本軍の行動経路などから文

禄の役までは可能性が残る。しかし、この場合でも、やはり1590年代前半頃までが限界であろう。

したがって、不確定要素も大きいながら、肥前の近世窯業は、現状では1580年代後半～1590年前後が最も有力な時期であり、降っても1590年代前半までの間には成立した可能性が高いものと考えられる。

おわりに

ここまで、肥前の近世窯業は、やはり北朝鮮の生産技術が源流となり、まずは岸岳山麓に定着した可能性がより高いことを示してきた。これまでのところ資料の限界もあり、推論を根拠に推論を重ねるといった感がやや強いことは否めない。しかし、これまで主流となってきた製品の類似性の比較には限界を感じているため、ここでは目先を変えて主として生産技術の観点から、技術の源流に迫ってみることにした。おそらくこの視点からも、これが現在の研究の限界であるが、とりあえず、手付かずにしている方法については、その限界点までは持ち上げておく必要はあるだろう。

従来、岸岳山麓の窯場は、文禄3年(1594)、岸岳城主波多三河守親の改易とともに、崩壊したと考えられてきた。いわゆる「岸岳崩れ」である。しかし、それを示す文献などの史料はなく、みてきたように、それ以後も継続して生産は行われていた可能性が高い。今、まだ十分な資料を得られない状況においては、こうした一つ一つのいわば「常識」をあらためて再検証し、的確な積み上げによって、研究の精度を高めて行く必要性も感じる。

肥前の近世窯業は、その成立段階には総体的に李朝の技術を基盤としている。ところが、周知のとおり、磁器創始以後は急速に中国色が強くなり、徐々に李朝の影響は感じられなくなる。しかし、示したように磁器もその生産基盤は陶器生産技術にあり、製品のスタイルなど表層的な部分は中国風であっても、生産現場では李朝が生き続けている。これは、実は近世を通じて基本的には変化しておらず、現代の窯業にも脈々と受け継がれてきている。技術の源流を探ること。それは、今日の窯業の位置付けを明確にする上でも、不可欠なことなのである。

註

- | | |
|---|--|
| (1)——中里太郎右衛門「唐津」『世界陶磁全集』第7巻 小学館 1980ほか | (8)——1998年に北波多村教育委員会が発掘調査を実施 |
| (2)——武雄市教育委員会『武雄市内古窯跡群発掘調査報告書Ⅲ(白木原2号窯跡・古屋敷窯跡)』1996 | (9)——東中川忠美「岸岳飯洞麓下窯跡について」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 1989 |
| (3)——大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社 1989 | (10)——九州陶磁文化館『北波多村帆柱窯跡』1987 |
| (4)——大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館 1984 | (11)——1997年に北波多村教育委員会が発掘調査を実施 |
| (5)——塩田町教育委員会「大草野窯跡調査概報」1997 | (12)——北波多村教育委員会『(仮称)皿屋上窯跡一現地説明会資料一』1999 |
| (6)——伊万里市教育委員会『阿房谷下窯跡』1985 | (13)——相知町教育委員会『道納屋窯跡確認調査現地説明会資料』1999 |
| (7)——盛峰雄「伊万里市内の17世紀の陶器窯跡について」『第3回九州近世陶磁研究会資料』九州近世陶磁研究会 1993 | (14)——村上伸之「肥前における初期の登窯について」『東洋陶磁』第27号 東洋陶磁学会 1997 |
| | (15)——上村佳典「菜園場窯跡」『古上野焼展』福岡県 |

-
- 立美術館 1987
- (16)——有田町教育委員会『小溝上窯・向ノ原窯』1995
- (17)——唐人古場窯跡調査委員会『唐人古場窯跡』1994
- (18)——伊万里市教育委員会『金石原窯辻窯跡・焼山上窯跡・焼山中窯跡・市の瀬高麗神上窯跡』1988
- (19)——九州陶磁文化館『伊万里市大川原1号窯跡』1994
- (20)——註(12)
- (21)——羅善華「16～17世紀における韓国の窯業技術」『東洋陶磁』第27号 東洋陶磁学会 1997
- (22)——伊万里市教育委員会『神谷窯跡(甕屋の谷窯跡)』1987
- (23)——唐津市教育委員会『小十窯跡』1988
- (24)——釉の色調やここでの定義, その他各地域の特徴については次の文献をご参照いただきたい。村上伸之「肥前における初期の陶器生産に関する考察」『研究紀要』第6号 有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館 1997
- (25)——伊万里市教育委員会『古窯跡分布調査報告書』1984
- (26)——註(18)
- (27)——中尾浩氏(佐賀県窯業技術センター)のご教授による
- (28)——1997・98年に浜玉町教育委員会が発掘調査を実施
- (29)——小学館『世界陶磁全集』第19巻 1980
- (30)——国立歴史民俗博物館『陶磁器の文化史』1998 p. 46
- (31)——小学館『世界陶磁全集』第7巻 1980 p. 35
- (32)——佐賀県立博物館『古唐津』1978
- (33)——堺市教育委員会『堺市文化財調査報告』第20集 1984
- (34)——森 毅「城下町大坂における唐津焼出現期の様相」『陶説』532号 日本陶磁協会 1997
- (35)——森 毅「大坂出土の唐津焼の変遷」『第4回九州近世陶磁研究会資料』九州近世陶磁研究会 1994
- (36)——森 毅「天満本願寺跡出土陶磁器の検討」『天満本願寺跡発掘調査報告』I 大阪市文化財協会 1995

(有田町歴史民俗資料館, 国立歴史民俗博物館企画展特別講演者)

(2000年6月30日受理, 2001年6月22日審査終了)

The Origin of Hizen Ware: to What Extent We Can Trace It Back from the Standpoint of Production Technology

MURAKAMI Nobuyuki

The early-modern pottery of Hizen developed rapidly to be on a par with large established places of production within ten years or so, thanks to the excellent techniques for those days. This is considered as one of the epoch-making event in the history of Japanese ceramics, and the vitalization of domestic ceramics was intended according to the products of such new ceramics as the model, including climbing kilns (*noborigama*) and porcelain production that feature the early modern ceramics. However, Hizen ware had no existing ceramics to follow as the matrix but was established through the introduction of a set of finished techniques from abroad. It has already been clarified that the original techniques were brought in from the Korean Peninsula when the Battles of Bunroku and Keicho (1592–98) broke out, but it did not serve as the foundation for the establishment of ceramics, but the base for the development. For the ceramics as the foundation for the establishment, it was once considered, though vaguely, that we could long trace it back to North Korea and that it was first established in later years at the foot of the Mt. Kishidake. At present, however, we have made little progress in the clarification.

Thereon, the author decided to consider to what extent we could trace it back to the source according to the materials currently available, from the standpoint of production techniques, apart from the traditional methodology that persistently applies the comparison of the product similarity to most cases. First, this paper considers the classification of technology lines as well as the classification of time universally used at present, and reconfirms the quality of the production techniques through the understanding of them, according to which the author searches into the technological significance of the ceramics produced at the foot of Mt. Kishidake in Hizen with particular attention to the kiln structure and the technique of placing vessels in the kiln. Thus the study indicates: that the kiln structure of Hizen are largely classified as three kinds; that a unique single vaulted climbing kiln (*waridakeshiki-noborigama*) was used at the foot of Mt. Kishidake; that the technique of placing vessels in the kiln, which was established in the area, was different from those of other areas, and that there is quite a possibility that those techniques were introduced from the Korean Peninsula. Next, based upon the results obtained in the first stage, the paper clarifies the similarity in the technology through the comparison with the

items collected from North Korea and through the comparison with materials excavated from the City of Osaka, and indicated a high possibility that for the time being we can trace the establishment of Hizen ware back to the period between the latter half of the 1580s and around 1590s.